『平家物語』巻四〈宇治川渡河ばなし〉の流動展開

――八坂系一類本の位置づけを中心に――

吉永優真

一　はじめに

『平家物語』諸本(一)のうち、八坂系諸本は読み本系や一方系(いちかたけい)に比べて先行研究が多くはなく、覚一本(かくいちぼん)などと比較するために副次的に用いられることが多い状況である。諸本の分類と先後関係の想定は、〔山田孝雄（一九一一）〕(二)をはじめとして、これまで紆余曲折を経ながらなされてきた。主要な論をおおまかにまとめると以下のとおりである。

・覚一本からその他一方系諸本、覚一系諸本周辺本文（以下、周辺本文）、そして八坂系一類・二類へと展開する。〔高橋貞一（一九四三）〕

・周辺本文から一方系と八坂系に分岐、そして流布本へと展開する。〔渥美かをる（一九六二）〕

・屋代本から八坂系（一類～五類）と一方系に分岐、周辺本文は一方系の末流とする。〔山下宏明（一九七二）〕

右の三説は、どれも八坂系諸本を下位に位置付けている（**【図5】**を参照）。

しかし、実際に覚一本と八坂系諸本（五類のうち、たとえば中院本(なかのいんぼん)）とを比較してみると、覚一本から八坂系へ派生したとは考えにくい箇所が多く存在する。全巻にわたって、覚一本に練成が認められるのである（稿者の見通し）。先行研究においては文献学的手法を用いて、八坂系と覚一本の差を八坂系の「崩れ」として処理しているが、そうした想定は非常に接近した本文同士の比較で効果を発揮するものであり（誤字や脱字脱文のレベル）、覚一本と八坂系のように章段、場面、文章の有無などのレベルで差が生じている場合には適用しにくいだろう。これまで「崩れ」とされてきた部分の見方を変えて、諸本ごとの内部論理を説明し、その位相差を比較することが本稿の目的である。

内部論理や位相差という用語についてだが、そもそも『平家物語』には数多くの異本が存在し、それぞれに性格が異なっている。それはつまり、その数だけの改作者がいるということでもある。それぞれの改作者の脳裡に浮かんでいる場面の風景があり、本稿で用いる場面で言えば、渡河成功の鍵はどこか、協力して隊列を組んだこと、水深の克服、水勢への対応、対岸の敵への対応、馬の扱いなど、様々な点がある。これらを描く際、なにかを強調しようとすれば、相対的に別のところの強調は薄れる。改作者の思い描いたことの違い、つまり各改作者の論理

（改作者の無意識的な認識も含む）のちがいが、諸本の異同として表れているのである。そういった改作者それぞれの内部論理を明らかにすることで、諸本の比較に一つの意味が生まれることとなる。内部論理の差を諸本の位相差として扱い、考察することにより、数ある諸本の位置づけが可能となるだろう。

さて、『平家物語』は、章段や場面によって異同がほとんど存在しない部分と、甚だしい異同が生じている部分がある。そして、異同の甚だしさは語り本系諸本の流動展開を説明することに適したものである。そこで本稿では、諸本によって異同の振れ幅が大きな、巻四「宇治橋合戦事」(三)末尾の、平家軍が宇治川を渡る場面を取り上げて、八坂系と一方系の位相差を見るために、八坂系諸本の中でも代表的に扱われている八坂系一類本、とくにB種の三条西家本（前田育徳会尊経閣文庫蔵の写本）・中院本（古活字本）を中心として(四)その位置づけをさぐる(五)。相対化して比較するために、［依拠テキスト］に掲げた八坂系諸本、周辺本文、一方系諸本など一八本を参照しながら、各本の内部論理や文脈、ひいては想定できる異本相互の先後関係について論じる。

本場面は、頼政挙兵譚の一部であり、奈良方面へ逃げていく頼政・以仁王らを平家軍が追いかけ、宇治橋にて両軍が合戦をし、奈良方面へ逃がしたくない平家軍が足利忠綱を中心として宇治川を馬筏で渡河する場面である。

この場面は大きく三分割することができる。まずは、場面の冒頭で、足利忠綱は渡河における注意事項などを下知する部分である。強い馬を上流側に、弱い馬を下流側にして隊列を組み、馬の足が着くうちは馬を歩かせ、足が着かなくなったら泳がせる。遅れた者は弓の筈を掴ませ、手を取り協力して川を渡っていく。隊列を組み、渡河に臨む文脈であり、ここまでを〈隊列認識〉と呼称する。

渡河が中盤に差し掛かると、三頭に移動したり、馬の頭を上げたりなど、水深への対応を指示する。宇治川の中ほどで水深が増すにつれて、それに対処する文脈であり、〈水深認識〉と呼称する。

対岸に近づいてくると、敵の攻撃に意識を向け、甲を傾けて矢を防御したり、こちらから射て体勢を崩さないようにするなどの指示がなされる。また、最後には全体に関して水流に従って渡ることなどを述べる。対岸の敵軍を意識した行動をする文脈が中心であり、〈対岸認識〉と呼称する。

以上の三つの認識に分割できる。『平家物語』研究においては諸本も多く、その相違も著しいため、ある程度結論を見通して整理した形で、すなわち演繹的に論述せざるを得ないところがある。それが上記の〈隊列認識〉〈水深認識〉〈対岸認識〉である。諸本によって渡河成功における重点が異なり、諸本ごとの場面形象の全体像も異なっている。そのことを、〈隊列認識〉〈水深認識〉〈対岸認識〉として整理した形で相違点を示していく。そして、それぞれの認識における相違点をもとに諸本の内部論理を比較検討し、三分割した場面に、〝協力〟〝横並び〟の違い、〝水勢〟から〝水深〟への焦点の変化、〈前景化指向〉〈文脈整理指向〉〈平明化指向〉〈明瞭化指向〉〈紐づけ指向〉（各用語については、第二節以降で適宜述べる）などによって諸本の展開・派生が生じていることを指摘する。

『平家物語』諸本の振れ幅が大きいことは、よく知られてい

る。先行本の忠実な転写本も存在しないわけではないが、『平家物語』研究の核心は、そうした振れ幅の大きさがなぜ、どのように生じたかを明らかにすることにある。先述のとおり、『平家物語』は異本の数だけ改作者が想定される。それぞれの時代性もおそらく異なっており、作者の位相（身分階層・年齢・性別など）も異なるはずだ。それぞれの差異の本質を明らかにするためには、それぞれの伝本（テクスト）の背後にある表現者の認識・指向を探りながら解読する必要がある。従来の研究が、テクストに表現された一語一語の〃意味〃を明らかにするものであったとすると、指向論はそれぞれの表現の背後に潜む、表現者の〃意図〃や〃認識〃を明らかにするものである。なお、ここでいう指向とは、顕在的な表現者の〃意図〃から、潜在的な、すなわち無意識的な意識とも言うべき〃認識〃まで、区別することなく包括的に指し示す術語である（六）。

また、これらの指向をもとに、八坂系一類本が語り本系諸本の中において古態に近い位置づけができるとの見通しがある。

二　〈隊列認識〉　――渡河冒頭――

諸本を比較分析するにあたり、準備作業として近接した伝本同士を類別するのだが、三つの認識を総合したグループは、各認識での細かな検討の結果としてはじめて見えてくるものである。その上、それぞれで類似近接する伝本が異なることもある。そのため、まずは、分割した認識ごとにグループを示し、最後にそれらグループを総合した位置づけを考えたい。

最初に、〈隊列認識〉について諸本の位相差を確認する。先述の通り、本場面冒頭から協力をするよう命令するところ（諸本により差がある）までが〈隊列認識〉である。このうち、詞章が分かれるのは忠綱の下知を示す部分と協力を示す部分（つまり〈隊列認識〉の冒頭と末尾）で、**【表1】【表2】**に示した部分である。途中の本文は異同が少ないため、本稿では特に引用しない。内容については、先述の場面梗概を参照されたい。

表1

	本文	伝本
①	足利、鐙踏ん張り、突つ立ち上がり、大音声をあげて下知しけるは	城方本・歴彩館本・城一本
②	足利、大音声をあげて下知しけるは	三条西家本・文禄本・中院本・斯道文庫本・小城本・百二十句本
③	忠綱、鐙踏ん張り下知しけるは	両足院本
④	足利、大音声をあげて	下村本・京師本・相模本・覚一本
⑤	足利、下知しけるは	竹柏園本・平松家本・鎌倉本
⑥	忠綱、下知しけるは	太山寺本

【表1】について、「鐙踏ん張り」「突つ立ち上がり」「大音声をあげて」「下知しける」の四つの要素があり、伝本により有する要素に差がある。①は四つすべて、②は「大音声」と「下知」、③は主語を「忠綱」と表記し（忠綱の表記差はそれほど大きな問題ではないため、要素としては省略する）、「鐙踏ん張り」と「下知」の二つ、④は「大音声」のみ、⑤は「下知」のみ、⑥は「下知」のみかつ、「忠綱」と表記する。この部分は、〈隊列認識〉とは直接関係なく、発話主体が誰であるかを示す

部分である。要素の有無の差は、すなわち忠綱をどれだけ前景化するかの差である。前景化とは、人物等を詳細に叙述・描写するなどして読者の意識をその部分に集中させることである。どの要素も忠綱へ注目が集中するものであるが、内容や組み合わせにより前景化の強さに差が生じる。

もっとも前景化されているのは要素をすべて持つ①であり、視覚的にも聴覚的にも強調がなされる。忠綱を英雄化しようとする意図が強く表れているのだろう(七)。次に強いのは②か③である。「大音声」か「鐙踏ん張り」かの違いがあるが、これは聴覚によるものか、視覚によるものかの違いだろう。前者は「下知」という発話行為を強調するものであり、後者は「鐙踏ん張り」によって暗に鞍から立ち上がることを示し、立ち上がった忠綱の身体が軍勢の中から突出することになる(八)。明確に「立ち上がり」と描写するわけではないため、①と比較すると前景化は弱いが、それに近い効果は有しているのである。また、呼称の差もあるが、これによる前景化への影響はないだろう。次に前景化が強いのは④であり、前景化度合いは②とかなり近い。「下知」がない点は場面末尾との関わりだと考えられるため後述する(第五節)。⑤⑥は「下知」のみであり、他と比べると前景化がかなり弱い。忠綱に注目は向くものの、前景化を意識しない叙述として捉えることができる。もっとも俯瞰的であるということだ。

前景化の強い諸本が古態なのか、あるいは弱いほうが古態なのか、これについては第五節で総合的に考察する。

【表2】は〈隊列認識〉の末尾部分で、重要な問題点である。㈠は遅れた者は前にいる馬の尾に取り付いておいていかれないようにしろ、という指示であり、前後の列を意識したものである。直前に存在する「一騎も下がらん者は、弓の筈に取りつかせよ」という一文と通底した文脈で、㈠に挙げた一文は遅れた者の視座、直前の一文は先に進んでいる者の視座に立った指示であり、〝前後〟の列であることを強調する。

表2	本文	伝本
㈠	先なる馬の尾に取り付け	城方本・歴彩館本・城一本
㈡	手を取り組み、互いに力を合わせて渡すべし	三条西家本・文禄本・中院本
㈢	手を取り組み、肩を並べて、数多が力を一つになせ	竹柏園本・平松家本・鎌倉本
㈣	手を取り組み（※）、肩を並べて渡すべし	両足院本・下村本・京師本 相模本・覚一本
㈤	肩を並べて渡すべし	斯道文庫本・小城本・百二十句本
㈥	当該ナシ	太山寺本

㈢は「手を取り組み、力を合わせて」とあるように、〝協力〟に焦点が当たる。㈢では「手を取り組み」及び「数多が力を一つに」とあるように（延慶本・長門本にも存在する）〝協力〟を強く意識しながら、「肩を並べて」と〝横並び〟に隊列を作ることも具体的に示している。㈣は「手を取り組み、肩を並べて」と、㈢よりは〝協力〟の意味が薄れるが、〝横並び〟と両方の意味を示しているのは変わらない。ただし、「手を取り組み」は、〝協力〟が含意されていることを読み取ることができるが、「力を合はせ」相当が存在しないために「肩を並べ」

と接続され、具体的な指示としての意味合いのほうが強く表れる。また㊂には※印を示した。意味はほぼ同じだが、表現の異同がややあり、両足院本は「手をかわして」、下村本は「手に手を取り組み」としている。下村本で「手」が重複するは強調表現のようなものと考えられるが(九)、両足院本は論理の判断が難しい。

㊄(十)では「肩を並べて」のみであり〝横並び〟に焦点が当たっている。㊅はそもそも当該部分がないが、これは直後の〈水深認識〉と通じるものであると考えられるため、後述する。

このように、隊列を組むにあたって意識する点が異なっている。〝前後〟の強調は、誰も取り残さないということに主眼があたり、渡河後の「三百余騎を一騎も流さず」という一文と通じている。本場面の前に宇治橋の戦いが行われるが、そこでは頼政側の兵が個人個人で奮戦しており、自分の番が終わるとすぐに逃げ去ってしまっていた。そうした頼政側の兵たちと、協力して渡河に臨む平家側の兵たちとの差別化がなされているのである。これは〝協力〟にも通じるもので、個人ではなく群れとして一塊での行動を重視する文脈である。それはすなわち〝横並び〟とも通じることとなる。そのように考えてみると、直前の文脈からのつながりである〝前後〟の意識が先に存在し、その後、誰も取り残さないというところから〝協力〟の意識へとつながり、〝協力〟とともに隊列を視覚的に叙述しつつ直前の文脈と対句的表現になる〝横並び〟に焦点が当たるようになったのだろう。登場人物の意気込みなど心理的描写があると、読者を同じ心情に引き込むこととなる。武士の団結という精神面の表現（協力）が先行し、それが視覚化された（横並び）のだともいえる。練成の過程として、〝前後〟から〝協力〟、そして〝横並び〟という順序での変容が想定されるということだ。これによって、読者を武士の精神に引き込むのである。

【表1】【表2】に挙げた以外の箇所については、諸本で大きな異同はなく、両足院本が「弾まばかい繰って泳がせよ」相当を持たないことと、太山寺本が「弓の筈に取りつかせよ」相当を持たないことが挙げられる程度である。前者は「馬の足の及ぶほどは」と対になる一文であり、意図的に脱落させるとは考えにくく、両足院本かその親本の段階で脱落してしまったのだろう。後者は、**【表2】**で挙げた一文が存在しないことと通底している。

以上、各諸本の場面冒頭部における内部論理として、前景化の強弱と前後左右の〈隊列認識〉、そして〝協力〟と〝横並び〟の意識の差を確認できた。

三　〈水深認識〉――渡河中盤――

次に、渡河中盤の〈水深認識〉について述べる。これは、川の中ほどまで進むことで、水深への対応をどのように行うか指示している部分である。〈水深認識〉に該当する部分は、先述の〈隊列認識〉や後述の〈対岸認識〉と比べて諸本ごとの異同が大きく、この〈水深認識〉こそ、語り本系の流動と同時に変化、練成されていった可能性が高い。

諸本本文は**【表3】**に掲げた。〈水深認識〉を構成する要素は、「鞍壺に乗り定めて、鐙を強く踏め」（以下、〝鐙〟）「水しとまば、三頭に乗り懸かれ」（以下、〝三頭〟）「馬の頭沈まば、

引き上げよ。いたう引いて、引き被くな」（以下、〝馬の頭〟）「馬には弱う、水には強う当たるべし」（以下、〝馬には弱く〟）の四つであり、伝本によってこの要素の有無と順番が異なる。

表3	本文	伝本
①	鞍壺に乗り定めて、鐙を強く踏め。水しとまば、三頭に乗り懸かれ。馬の頭沈まば、引き上げよ。いたう引いて、引き被くな。	三条西家本・文禄本・中院本
②	鞍壺に水しとまば、三頭に乗り下がつて、馬には弱く、水には強くあたるべし。鞍壺に乗り定まつて、鐙を強く踏め。馬の頭沈まば、引き上げよ。いつたう引いて、引つ被くな。	城方本・歴彩館本・城一本
③	水しとまば、三頭の上に乗り懸かれ。馬には強ふ、水には弱ふあたるべし。鞍壺に乗り定まつて、鐙を強ふ踏め。	竹柏園本・平松家本・鎌倉本
④	馬の頭沈まば、引き上げよ。いたう引いて、引きかつぐな。馬には弱く、水には強くあたるべし。	斯道文庫本・小城本・百二十句本
⑤	水しとまば、三頭の上に乗り懸かれ。馬の頭沈まば、引き上げよ。いたふ引きて、引き被くな。馬には弱く、水には強うかかるべし。	太山寺本
⑥	馬の頭沈まば、引き上げよ。いたう引いて、引つ被くな。鞍壺によく乗り定めて、鐙を強う踏め。水しとまば、三頭の上に乗り懸かれ。馬には弱う、水には強うあたるべし。	両足院本・下村本・京師本
⑦	鞍壺によく乗り定まつて、鐙を強う踏め。馬の頭沈まば、引き上げよ。いたう引いて引つ被くな。水しとまば、三頭の上に乗り懸かれ。馬には弱う、水には強う当たるべし。	相模本・覚一本

①は、まず〝鐙〟が先にあり（十一）、水勢に耐えている状態から〝三頭〟へ続き、水深が深くなっていく様子が描かれる。鐙とは騎手が座る鞍に接続されている、足を置く場所（自転車のペダルを想像するとわかりやすい）である。三頭とは馬の尻の少し高くなった部分で、騎手は迫る水位から逃れるために移動する。そして〝馬の頭〟が続くが、三頭に乗りかかった状態から馬の頭を引き上げるのは、体勢からしてやや現実的ではないように思われる。①はそのような現実感よりも「しとむ」（鞍のあたりに水が迫っている状態）から「沈む」（馬の頭までも完全に沈んでしまう状態）への深まり表現の連続性を重視したのだろう。また、〝鐙〟や〝三頭〟は騎手自身が動いて水勢・水位に対処する文脈（以下、〝水への対応〟）であるが、〝馬の頭〟は馬を操作する文脈（以下、〝馬への対応〟）である。つまり、意識を向けて描いている先が〝水〟と〝馬〟で分かれているのであり、①にはそれらを対として叙述する意識がうかがえる。深まり表現も対句的表現も、前後の語句の親和性に焦点を当てる微視的（十二）な叙述によるものである。

③は、はじめから鞍壺のあたりまで水位が迫っており、騎手は三頭に避難する。そこに〝馬には弱く〟が挟まり（歴彩館本は順序が異なる。後述する）、その後に〝鐙〟が来ている。鐙を踏んで姿勢が定まった状態で〝馬の頭〟と馬への対応を行う。姿勢を定めた状態で馬の頭を引き上げるため、①ではやや現実的ではなかった体勢の問題は解消されていると言ってよいだろう。これは、二つ以上の文脈が混在しているなどの理由で内容がわかりにくい状態を整理してわかりやすくする、〈文脈整理指向〉である。この整合性は③の特徴といえる。ただし、はじめに三頭へ移動しているため、あとから鞍壺に乗っている描写をするのは不自然である。間に〝馬には弱く〟の一文があることで文脈が一度途切れたのだろうが、詞章の連続性は損な

われてしまっている。

この〝馬には弱く〟は「乗り下がって」から続くので、三頭に乗り下がることが馬に弱く当たったということになるのだろうが、果たしてそうだろうか。三頭は、『太平記』巻第三二「神南山合戦の事」に「あはれ敵やと打ち見て、馬の三頭に飛び乗り、敵と二り馬にぞ乗つてぞ馳せ下りける」(十三)とあるように、騎手のいる位置から後ろ一人分の位置である。鞍を置く場所に比べるとやや高くなっており、確かに迫る水位から逃げるには妥当なところだ。しかし、鞍壺に比べると安定しない上、馬の後脚の付け根で歩きにくさもあるだろう。しっかりと鞍に乗っている場合でも、騎手の些細なミス等で混乱してしまうことがあるほどである。普段乗らない場所に乗りかかれば馬へのストレスとなることは容易に想像できる。やはり〝馬に優しくする〟と捉えるのでは意味が通りにくい。そうではなく、〝馬に対する意識は弱くする〟ということであれば、馬よりも水のことを気にして対処しろという命令になるので意味は通るが、用例が見当たらないため確かなことは言えない。その点、三条西家本(挿入位置が異なる)や竹柏園本などのように「馬には強く」であれば、馬には厳しく当たり、水に対しては流れに従うという文脈として理解しやすい。

また、「鞍壺」の重複もこの一文が挟まっていることが原因だと言える。水位が迫ってきているのも、乗り定めるのも「鞍壺」であり、①のように連続して描写されるのであればどちらも「鞍壺」であることが明確であるが、ⅲは一文が挟まるために、どこに水位が迫ってきているのか、どこに乗り定めるのかをそれぞれ明確にする必要が生じる。仮に「鞍壺」を示さなかった場合、水位が迫ってきているのは直前に述べている馬の尾を、乗り定めるのは移動した先の三頭を指していると捉えられかねない。それを避けるため、どちらにも「鞍壺」が明記されるのだろう。ⅱなりの論理で、主語・述語の関係などを明確にする〈明瞭化指向〉である。

ⅲは、ⅱから〝馬の頭〟を削除したかのような構成である。ここで考えられる可能性としては、ⅱが追加したか、ⅱのような構成からⅲが〝馬の頭〟を脱落させたか、あるいは意図的に削除したのかである。まず、ⅱが追加させた可能性だが、騎手の体勢の話題に〝馬への対応〟の話題を付け足すのは考えにくい。というのも、ⅲは直前の〝協力〟を呼びかける部分から、次節で述べる錣(しころ)を傾ける部分までは、一貫して〝水への対応〟について呼びかけている。そのようにひとつの話題で占められているところに、異なる文脈である〝馬への対応〟を新たに差し込むことは考えにくい。水と馬とで、文脈が二方向に拡散してしまうためである。

次に、ⅲの脱落の可能性について、竹柏園本・平松家本・鎌倉本のどれかをこのグループの親として、その一本から直線、あるいは兄弟的に書写された場合を除いて(別途、検証が必要となる)、三本が同様に脱落するというのは考えにくい。そして、意図的に削除した可能性についてであるが、先述のとおりⅲは〝水への対応〟のみで一貫した文脈となっているため、それにあわせて〝馬の頭〟が削除された可能性は十分に考えられる。よって、消去法的ではあるが、現状でもっとも可能性があるのは〈文脈整理指向〉による削除が行われたものと考えられる。また、この三本が直接の親子関係であっても、さらに上の

親本が同様の意図で削除していることも考えられる。

ⅱでは「鞍壺」が重複していたが、同じ構成であるⅲには一度目の「鞍壺」が存在しない。これは、直前が「馬の尾」ではなくなり、水位を気にして移動する必要がある場所は騎手が座っている「鞍壺」であるとわかりやすくなったためだろう。二度目のほうが存在しているのは、「馬には強く」の一文が挟まったために、「乗り定まって」のかかる先を明確にする意図があったのだと考えられる。

そして、先述のとおり、ⅲは「馬には強ふ、水には弱ふ」としており、文脈がわかりやすい。馬を大切にすることではなく、水位や水勢への対処に意識が向き、意味が通じやすくなるとともに、後半の「水に従ひ」とも対応することになる。これはⅲの三本と①の三条西家本・文禄本とで共通しているが、三条西家本・文禄本は〈対岸認識〉に属する部分に存在しており、ⅲとは論理が異なっている（第四節）。

ⅳは、ⅲとは反対に〝水への対応〟部分が存在しない点が特徴的である。つまりⅳは、残る〝馬への対応〟の文脈のみによって水深の深まりを表現しているということだ。〈文脈一本化指向〉である。そのように考えると、これに続く〝馬には弱く〟も〝馬への対応〟の文脈ということになる。呼吸ができない状態の馬の頭を引き上げて助けるという点が「弱く」と通じるのである。「水には強く」は、「馬」の対句として出しつつ、馬を助けながら水位や水勢には力を入れて対応していくことを指していると捉えることができる。

ⅴは、〝水への対応〟である〝三頭〟が先に示される。①から〝鐙〟を抜いたとも、ⅳに〝三頭〟を追加したともとれるが、論理としては①と同様、〝三頭〟から〝馬の頭〟という体勢の不自然さを残しつつ、「しとむ」と「沈む」の連続性に焦点が当たっている。ただし、〝鐙〟が存在しない点は異なり、水勢への対応は薄くなる。

前節において、太山寺本は〈隊列認識〉の核となる部分が存在しないことを指摘した。本節で挙げた本文はそのことと関連しており、〈隊列認識〉部分に存在する水深に応じた手綱の操作は〈水深認識〉として〝三頭〟と通じる。その後の〝馬の頭〟も同様に〈水深認識〉によるもので、一貫して〈水深認識〉が存在しているのだと考えられる。存在しない〝鐙〟は水勢に耐えるための行為であって、〈水深認識〉に位置付けるにはふさわしくないということだ。兵たちの連帯感は描かれず、〈隊列認識〉の部分に存在する水深に合わせて馬の操作をする文脈も含めて、水深への対応に焦点化している。太山寺本なりの論理である。

ⅵでは、三本間の異同として両足院本が「水には強う、馬には弱う」の順にしていることが挙げられる。本稿で使用した伝本のうち、両足院本と同順とするのはⅱの歴彩館本のみである。意味自体は変わらないが、「水」が先に来るのは、直前にある「水しとまば」からのつながりによるものだろう。下村本・京師本の順は、〝馬の頭〟〝鐙〟〝三頭〟の叙述順（〝馬への対応〟から〝水への対応〟）に合わせたものと言える。反対に、「馬には弱う、水には強う」の順に合わせて〝馬の頭〟から〝三頭〟までの叙述順を変えた可能性もあるが、その場合は①のような本文かつ「水には強う、馬には弱う」の順にしている本文が先に存在していたか、歴彩館本的本文を大胆に組み替えた

と想定する必要がある。

〝水への対応〟と〝馬への対応〟の両方を持つⅥだが、Ⅰとは異なる順で叙述する。すなわち〝馬の頭〟を先に持ってきた形である。それにより、Ⅰで生じていた体勢の不自然さが解消される。Ⅱは〝三頭〟を先に持ってくることによって体勢の不自然さを解消し、かえって〝三頭〟から〝鐙〟への流れの不自然さが生じてしまっていたが、Ⅵは手法を変えることでどちらも解消しているのである。ただし、新たな不自然さは生じており、間に〝鐙〟があることで「沈む」と「しとむ」の連続性が失われている。Ⅵの論理としては、〝馬への対応〟〝水への対応〟の対を維持しつつ、体勢の不自然さを解消することに焦点を置いたということなのだろう。〈文脈整理指向〉である。

Ⅶは、他本にはない叙述順となっており、Ⅵの〝馬の頭〟と〝鐙〟を入れ替えた形である。これにより、Ⅵが失っていた「沈む」と「しとむ」の連続性が維持され（Ⅰでは「しとむ」から「沈む」の順であったが、こちらは反対である。どちらにしても、水深の深まりを示す表現としては連続していたほうが対として自然である）、かつ〝馬への対応〟と〝水への対応〟の対も維持される。また、体勢を定めて馬の頭を引き上げ、鞍壺から三頭へ移動する、という体勢の不自然さも解消されている。〈文脈整理指向〉である。馬の頭と三頭では前者のほうがやや高い位置にあるため、水深の深まりとしては十分ではないものの、迫る水位への意識は残されている。鞍壺から三頭への移動によって、迫る水位から騎手が逃げる様子が表現されており、深まり表現の代替として騎手の移動を描写したのだろう。あるいは、「水しとまば」の示す先は明示されておらず、鞍壺とも騎手自身ともとれる。明示されていないと捉えるとすれば、深まり表現の問題はそこまで大きくないだろう。Ⅰに比べると、文脈整理の視野が広がっている。

以上、もっとも差のある〈水深認識〉部分の考察を行った。Ⅰは微視的な叙述に終始し、深まり表現の連続性と対句構成の維持に重点が置かれていた。Ⅱでは全体の流れに不自然さはあるものの、体勢の不自然さは解消するという〈文脈整理指向〉が見られ、同時に、主語を明確にする〈明瞭化指向〉も確認できた。Ⅲは〝水への対応〟の文脈に絞っており、焦点化が確認された。Ⅳでは文脈が〝馬への対応〟に絞られ、Ⅲとは異なる焦点化がうかがえる。Ⅴは〈水深認識〉への焦点化が見られた。Ⅵは、Ⅰ とⅡのいいところを拾い上げた形で、〝水への対応〟と〝馬への対応〟の対を維持しつつ、体勢の不自然さも解消するという〈文脈整理指向〉が確認できた。ただし、「沈む」と「しとむ」の連続性は顧みられていなかった。Ⅶは、Ⅵのような状態から、さらに「沈む」と「しとむ」の連続性を維持している点で〈文脈整理指向〉を持ち、それによって、渡河中盤として示す必要のある〈水深認識〉に焦点を当てている。ここでも練成の過程が想定できる。

また、〝馬には弱く〟の一文を末尾に持つ、Ⅳ～Ⅶは、直後に来る〈対岸認識〉との区切りも意識していると考えられる。

四　〈対岸認識〉　――渡河終盤――

最後は、渡河終盤における〈対岸認識〉についてである。川を渡って敵のいる対岸に近づくにつれて、敵の攻撃を意識した

対応を指示する部分で、前節の〈水深認識〉ほど異同があるわけではないが、冒頭の〈隊列認識〉ほど少ないわけでもない。本文は【**表4**】に示した。

表4

	本文	伝本
㋐	甲の鐙を常に傾けよ。あまりに傾けて、天辺射さすな。敵射るとも、あひ引きすな。射向けの袖を真向に当てよ。馬には強く、水には弱く当たるべし。かねに渡して過ちすな。水にしなうて、渡せや渡せ」と下知しつつ、三百余騎を一騎（注14）も流さず、向かひの岸へさつとぞ渡す。	三条西家本・文禄本 ・中院本
㋑	川中にて敵射るとも、あひ引きすな。甲の鐙を傾けよ。いったふ傾けて、天辺射さすな。かねに渡ひて、過ちすな。水にしなうて渡すべし。渡せや渡せや」と下知しつつ、三百余騎を一騎も流さずず、向かひの岸にさつと渡す。	城方本・歴彩館本
㋒	敵射るとも、川中で弓引くな。射向けの袖を額中に当てよ。常に鐙を傾けよ。いつとう傾けて、天辺射さすな。瀬枕に馬乗り懸けて、過ちすな。かねに渡りて、おし落とさるな。水に随ひ、渡せや渡せや」と下知して、三百余騎を一騎も残さず、向かひの岸にさつと渡す。	竹柏園本・平松家本 ・鎌倉本
㋓	敵射るとも、あひ引きすな。常に鐙を傾けよ。あまりに傾けて、天辺射さすな。かねに渡して、過ちすな。水にしなひて、渡せや渡せ」と下知をして、三百余騎を一騎も流さず、向かひの岸にざつと渡す。	斯道文庫本・小城本 ・百二十句本・太山寺本
㋔	川中で弓引くな。敵射るとも、相引きすな。つねに鐙を傾けよ。いたう傾けて天辺射さすな。かねに渡いて押し落とさるな。水にしなうて渡せや渡せ」と掟てて、三百余騎、一騎も流さず、向かへの岸へざつと渡す。	城一本・両足院本 ・下村本・京師本 ・相模本・寛一本

まず、㋐については、前節において①以外のすべてが有していた〝馬には弱く〟が、こちらに存在している。その理由として考えられるのは、具体的な指示と抽象的な指示との区切りの役割である。冒頭から、馬の強弱による上下の区別、馬の足が届く時とそうでないときの対処方法など、当該部分の直前まで実際の状況に即した指示がなされているが、これ以降、個別事象ではなく全体的な行動の指示を行っており、指示の種類が変わる。当該部分も抽象的、総括的な一文であるため、後半へまとめて叙述しているのだろう。

三本のうち、中院本のみは「馬には弱く、水には強く」としており、一方系諸本と共通している。三条西家本と中院本の位相差にかかわる部分であるが、この後「水にしなうて」とあるように、水に真っ向から対峙しているのでなく、水勢を受け流そうとしている文脈であるため、ここでは三条西家本のような「馬には強く、水には弱く」としたほうが自然だろう。この場面に限ったことではあるが、三条西家本本文から中院本本文への直線関係がうかがえる。中院本本文の後出の可能性が高いということだ。

内容について見てみると、頭を傾けて飛んでくる矢を先んじて防御し、そこに敵が射てきてもこちらは射ず、腕を額に当てて防御する、という流れで、どちらも矢に対する防御として意味内容がやや重複ぎみである。また、〝甲の鐙〟が先に来るのは、「〜しろ」「〜しすぎるな」という対句の構造が、〝馬の頭〟と〝甲の鐙〟で対応するためだろう。

㋑は、㋐と同様に防御のみに言及しており、受け身的な内容である。異なるのは「あひ引きすな」の後に「鐙を傾けよ」があることで、敵の攻撃を受けての防御ということになる。この点、㋐の叙述順では、敵の攻撃とは関係なく、対岸に近づく際は初めから防御姿勢になることを指示し、その後実際に攻撃が

来たら腕を額に当てて防御するという二重の防御となっている。つまり、㋐が重複させていた防御の文脈を、㋑では詞章が入れ替わることで予防・先制的な防御がなくなり、〝射向けの袖〟が存在しないことで、防御の重複が解消されている。これは〈文脈整理指向〉である。

敵の攻撃について言及してから防御の対応の指示をするという文脈の流れに整理されているため、最初から防御に徹する㋐の内部論理とは差が大きい。

その上、㋐にはなかった「川中にて」が存在することにより、状況設定がなされている。㋐の場合は、設定がないために文脈から判断するしかないが、㋑は明示することによって、射返さないのは川の中においてだけであると、この状況限定での対応であることを明示する。こちらは〈明瞭化指向〉と言っていいだろう。

㋒は、三本の間で細かな異同がある。竹柏園本のみ「敵射るとも」と「いつとう傾けて」が存在しない。どちらも単なる脱落と考えることもできるが、前者が存在しないことに意味を見出すとすれば、敵の攻撃の有無にかかわらず川の中で弓を使うこと自体を禁止しているということになるだろう。対する平松家本・鎌倉本は、敵が射てきた場合に限定しており、射返すことを禁止していることになる。後者「いつとう傾けて」が存在しなければ、天辺（てん）を射させないために鏑を傾けているかのような叙述となり、意味が通らない。竹柏園本かその親本の段階で、「傾」を目移りするなどして脱落させてしまったのだろう〔十五〕。平松家本・鎌倉本的本文から竹柏園本（あるいはその親本）が脱落させたのか、あるいは共通祖本から脱落のある竹柏園本的本文と脱落のない平松家本・鎌倉本的本文に分裂したのかは検討の余地がある。

他に、忠綱の発話後において、鎌倉本では「と麾て、三百余騎も残さず向かひの岸にざつと渡す」とあり、「下知」相当部分が「麾て」という動詞で、「一騎」が存在しない。後者は「騎」の目移りによる脱字と考えられるが、前者は「麾下」という熟語があるように「指図する」という意味の語である〔十六〕。よって、「下知」と意味に大きな違いはないと判断できるため、異同の指摘に留めることとする。

さて、㋒の特徴としては、㋐に存在し、㋑には存在しなかった〝射向けの袖〟が存在する点、「甲の」を「常に」とする点、㋑と同じ叙述順である点、そして独自の〝瀬枕（せまくら）〟の一文が存在する点が指摘できる。〝射向けの袖〟を持ちながら、叙述順は㋑と同様であるため、㋐と㋑両方との関連性が考えられる。内部論理としては、㋑のように受身の防御の文脈に整理する〈文脈整理指向〉が働いていると考えられる。つまり、㋐よりも自然な文脈になっているということだ。しかし、〝射向けの袖〟があるため防御の文脈は二重のままである。㋐㋒ともに「あひ引き」の直後に〝射向けの袖〟を持つため、両グループはそれらをひとまとまりとして扱っている可能性がある。片腕を防御に回して、強制的に弓を射ないようにするということなのだろう。

㋐㋑と異なる点として、「常に」が挙げられる。㋐は「常に」の位置が異なり、㋑は存在していない。㋐㋑は「甲の鏑を」と鏑の説明が詳細にされるが、㋒は「甲」相当の位置に「常に」があり、説明が省略される。おそらく、「鏑」といえば「甲」

の一部であるという意識が根底にあって省略されたのだと考えられる。また、「常に」が入ることで防御への意識が強まることになる。「敵射るとも」の後に鏃を傾ける指示をしているため、「常に」がない場合は飛んでくる矢に対して適宜対応するという意図に捉えられかねない。㋓㋔も㋒と同様の論理があると考えられる。

そして、〝瀬枕〟の一文について、〝瀬枕〟とは川の中にある物に水流が当たって、水面が盛り上がっているところを指す。つまり、水中の物体に乗り上げてバランスを崩し、落下するなどしないようにしろ、という指示であり、馬の足がつく程度の浅瀬であることがわかる。深い場所を超えて対岸に近づいてきたことを示すための一文なのだろう。また、「過ちすな」がこちらの一文に付随し、㋐などで「過ちすな」相当があった場所には、新たに「押し落とさるな」が存在している。これは㋔と共通した表現であるため、後述する。

〝瀬枕〟の一文は、対岸からの攻撃に対応するという文脈の中においては異質で、むしろ最後の俯瞰的・総括的な指示の文脈の一部かとも思われるが、当該部分は俯瞰的・総括的な内容ではなく、馬の操作あるいは水深に関する内容であり、どちらの文脈にあったとしても〈対岸認識〉部分では親和性が低い（〈水深認識〉であれば、違和感がなかっただろう）。他本で採用されないのはこれが理由だろう。

㋓は、「川中で」相当部分がなく、㋐と類似する。ただし、叙述順は㋑に同じで、むしろ、㋑から「川中にて」を削除したような、受け身的で防御に徹する叙述である。また、「かねに渡して」に続く一文が「過ちすな」であり、㋐や㋑と共通している。

㋔では、「川中で弓引くな」という一文に注目したい。㋒にも同様の一文があったが、㋔では直後に「敵射るとも、あひ引きすな」が存在しており、対岸が近づいたことで忠綱側から先制攻撃してしまうことを禁止することに加え、相手から射られた際の反撃も禁止するという二重の禁止である。これは言い換えれば能動と受動であり、攻めている側である忠綱側が、その勢いのまま川の中という不利な状況で弓を射て、バランスを崩したり、守りが不十分で射貫かれたりしてしまう危険があることを想定した発言である。㋔以外では基本的に「敵射るとも」が先に来ており、上記のような意識は感じられないため、㋔特有の論理と言える。

そして、「押し落とさるな」は㋒と通底する。それ以外が「過ちすな」とすることと比べると、㋒と㋔のほうが、どのような「過ち」なのかが明確となる。これは、より伝わりやすい言葉に変える〈平明化指向〉である。

さらに、㋔は発話後を「掟てて」とし（城一本を除く）、他グループは「下知して」としていることに比べると上下関係の様子が薄れる。これは、八坂系と一方系の違いと言っても相違ない。また、ここで「下知」としないことで、〈隊列認識〉の際に忠綱が「大音声」のみで描かれていたこととつながる。他本は「下知して」で閉じるからこそ、冒頭も「下知して」で始めなければならないが、㋔はそれを破り、「下知」としないからこそ、冒頭も「下知」と示さなくて良いのである。忠綱の前景化、あるいは上下関係を薄くする意識があるのだろう。

また、細かな点ではあるが、城一本・両足院本・下村本・京

師本は最後が「打ち上げたる（たり）」で終わっている。城一本の本場面直後を見てみると、「その後、足利、高きところに打ち上がり、鞭にて鎧の水なで下し鐙踏ん張り」と「打ち上げ」が重複しており（十七）、両足院本・下村本・京師本は、どれも「足利がその日の装束には」などとして装束描写が続いている。後者は前者の重複を解消した形なのだろう。

以上、〈対岸認識〉について考察を行った。㋐は、具体と抽象の切り替え意識が存在し、また、対句の構成をする微視的な論理であった。㋑は、〈文脈整理指向〉と〈明瞭化指向〉が見られ、㋒では〈文脈整理指向〉と〈平明化指向〉が確認できた。㋓の指向はほとんど際立ったものはないが、受動的な防御の文脈をもっていることは確認できる。㋔は、能動と受動の変化に加えて、㋒と同様の〈平明化指向〉を有していた。

〈対岸認識〉としての大きな違いは、敵が近づくことに合わせて先に防御しておくか（㋐）、敵の攻撃に合わせて防御するか（㋑・㋒・㋓）、敵に近づくことで攻撃できる距離でも自軍から攻撃はせず、敵の攻撃に合わせて防御を行うか（㋔）、の三種類の違いがあると言える。

五　八坂系一類本の位置づけ

前節まで、場面を〈隊列認識〉〈水深認識〉〈対岸認識〉と三分割して、各諸本における〈宇治川渡河ばなし〉の内部論理を考察してきた。本節では、これまでの考察を踏まえ、その内部論理の諸本展開を考察したい。はじめに、それぞれの意識における先後関係等を確認し、最後にその結論を総合して、諸本の位置づけを考える。

まず、〈隊列認識〉について、全体としては、前後の列か、左右の列かという差以外は、おおむねすべての伝本に共通する構成であり、〈隊列認識〉の文脈は語り本系のかなり古い段階から固定化されていたと考えられる。語り本系よりも古態を存するとされている読み本系を見てみても、たとえば延慶本では、

忠綱、申しけるは、「かやうの大河を渡すには、強き馬をおもてに立て、弱き馬を下に立て、肩を並べ、手を取り組みて渡すべし。その中に、馬も弱ふて流れむをば、弓の筈をさし出だして取り付かせよ。あまたが力をひとつに合はすべし。馬の足の届かむ程は、手綱をくれて歩ませよ。馬足浮かば、手綱をすくふて泳がせよ。

とあり、四部本、長門本なども、一部延慶本にない本文が存在する以外は、ある程度似通った構成のようだ。〝協力〟と〝横並び〟に相当する部分が分裂し、馬の強弱による隊列の文脈と、流れた者を助ける文脈とでそれぞれの具体と抽象の対比を生んでいる。そしてその後に〝馬への対応〟が位置する。これが、語り本系の段階では抽象部分を一括して末尾に配置された。〝馬への対応〟は、これより後に配置してもおかしくないが、個別の事象に対応するための操縦ではなく、渡河全体にかかわる操縦の指示であるため、最初の渡河準備段階に配置する必要があったのだろう。

第二節で述べたことを改めて確認すると、忠綱についての描写は前景化の強弱の違いであった。前景化は練成の結果として

後出的に捉えることが多いが、そのすべてがただちに後出だと判断できるかというとそうではない。前景化することによって何を描きたいか、前後の話題とどのような関連が生まれるかといった部分が問題である。本場面直後、「宮乃最期」冒頭の本文を見てみると、前景化が最も強かった①（**【表1】**を参照）は、

その後、足利、高き所に打ち上がり、鞭にて鎧の水なで下し、鐙踏ん張り、突つ立ちあがり、大音声をあげて

とし、本場面と同様の表現を用いており、両場面の前景化度合いは同程度と言える。また、「鐙踏ん張り立ち上がり」と、忠綱を兵の群れから突出した形で位置づけさせ、鎧の水を払う描写をすることで忠綱に接写している。動作による前景化である。②のうち三条西家本・文禄本・中院本は、

足利は、滋目結の直垂に、緋縅の鎧を着、白葦毛の馬に、金覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙踏ん張り立ち上がり

とあり、斯道文庫本・小城本・百二十句本では、

足利は、褐の直垂に、赤皮の鎧着て、白月毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりけり。鐙踏ん張り、突つ立ち上がつて、鎧の水うち払い、まづ名乗りけるは

とする。本場面冒頭が「大音声を上げて、下知しけるは」であったのに対し、どちらも「鐙踏ん張り（突つ）立ち上がり」として前景化のための表現が冒頭と右の一文とで異なる。こちらは装束描写と忠綱の動きによる前景化である。冒頭部のような「大音声」だけでは、群れの中から忠綱の身体は突出せず、声だけが聞こえてくるような形であるが、こちらは装束描写で忠綱の身体に接写した後、「鐙踏ん張り立ち上がり」によって忠綱の身体が群れから突出することで忠綱だけに焦点が当たることになる。そのため、冒頭部と比べると（質は異なるが）かなり前景化が強い。

また、三条西家本らと斯道文庫本らで異なるのは、後者に「鎧の水うち払い、まづ名乗りけるは」という一文が存在する点である。これによって、装束描写による前景化だけでなく、動作による前景化もなされる。その上、「名乗り」による前景化も含まれており、三条西家本らよりも格段に前景化を強めているのである。

④の、たとえば覚一本では、

足利、その日の装束には、朽葉の綾の直垂に、赤皮縅の鎧着て、高角うつたる甲の緒締め、黄金造りの太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連銭葦毛なる馬に、柏木に木蒐打つたる黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙踏ん張り立ち上がり、大音声上げて名乗りけるは

とある。下村本・京師本は「切班（きりふ）の矢」の直前に「二十四さいたる」があり、最後の「名乗りけるは」が存在しない。③両足院本もほとんど無視できる異同であるため、右の場面については暫定的に下村本・京師本と同列に扱うこととする（十八）。④は

本場面冒頭では「大音声をあげて」のみであったのが、こちらでは装束描写が①②よりも詳しく、その上で「鐙踏ん張り」と「大音声」とあわせて三種類の前景化がされており、さらに強まっている。③は「鐙踏ん張り」が重複している形になるが、前景化度合いは明らかに右の場面のほうが強い。

冒頭の前景化がもっとも弱かった⑤は、

足利は、朽葉の綾の直垂に、赤皮綴の鎧着て、高角うつたる甲の緒を締め、黄金造りの太刀佩き、切斑の矢負ひ、村滋籐の弓持って、連銭葦毛馬の太く逞しきに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙踏ん張り立ち上がり、物の具の水なで下し、大音声を上げて名乗りけるは

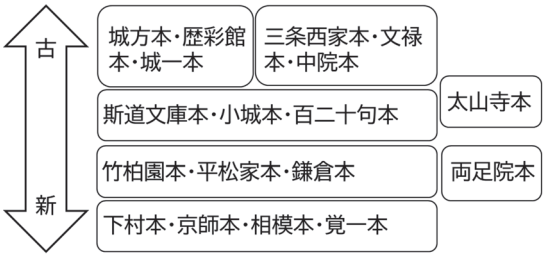
として、④同様、装束描写と「鐙踏ん張り」があり、加えて動作による前景化がなされている。②の斯道文庫本らの詞章をより強化した形である。⑥は冒頭部こそ⑤と同列であったが、こちらはやや弱く、

忠綱はけちやう（十九）の直垂に赤威の鎧着て、白葦毛なる馬に乗り、物の具の水なで落とし、鐙踏ん張り立ち上がりて、大音声をあげ

というように、④的詞章と⑤的詞章の一部を拾い集めたかのような詞章となっている。そのため、前景化の要素としては①と②の中間程度となっている。独自の系統を進んでいるのだろう。

つまり、第二節で述べた前景化の強弱は、場面直後と連動しており、片方を強く前景化したならば、もう片方の前景化を弱くするということである（これを後景化というべきか）。①と②（とくに三条西家本・文禄本・中院本）は冒頭部の前景化のほうが強く、②（斯道文庫本・小城本・百二十句本）は中間的、④⑤は直後の場面の前景化のほうが強いということだ。

では、本場面冒頭と直後のどちらを前景化する本文が古態に近いのか、という視点で考えてみる。忠綱の発話は渡河場面のほうが長いが、直後の場面では名乗りを上げながら敵陣に突っ込んで奮闘し、最終的に頼政側の敗北へとつながるという、戦の勝敗に直接かかわる重要な場面である。そのような重要な場面と、それにつなげるための前座的な場面とでは、重要な場面のほうがメインとなることは当然であり、忠綱の前景化も強化されていくと考えられる。すなわち、渡河場面の前景化を抑えつつ、直後の場面の前景化を強めていくものが、後出的だと考えられる。以上をまとめて【図1】に示した。



【図1】

ただし、⑤のように冒頭部の前景化を弱くし過ぎては、渡河の迫真性が弱くなる上、右のように二重になると焦点

が拡散し、さらに間に「物の具の水なで下し」と動作が入ることで間延びして、やはり勢いが弱くなる。④はそのあたりのバランスをうまくとって、それぞれの場面に適した前景化を施している。そのため、⑤は④よりも前の段階にあるのだろう。一度強くなり過ぎた表現を適切に抑制していくような意識があるということだ。③・⑥はやや特殊で、前者は④よりは古い、後者は②（斯道文庫本ら）の前後あたりという程度までしか絞ることができない。

次に、前後の隊列か、左右の隊列かの問題である。前後とするのは㊀（**【表2】**を参照）のみで、他諸本においては左右の列という点は同じだが、〝協力〟か〝横並び〟かの違いがあった。㊀にのみ存在する「先なる馬の尾に取り付け」は、実は読み本系の四部本に「前の馬の尾に取り付かせよ」、長門本では「先なる馬の尾に取り付け」とあり、とくに長門本の表記は㊀と完全に一致する。つまり、㊀は読み本系の長門本かそれに相当する本文からの影響を強く受けているということだ。ただし、読み本系には、分離しているとはいえ左右の列の文脈も存在している。㊀かそれより前の段階で、前後と左右どちらに絞るかが分裂したのだろう。㊀と他の左右の列にする諸本とでは、系統が違う可能性がある。

では、左右の列にする諸本はどうか。第二節に述べたように、諸本によって〝協力〟と〝横並び〟という意識の差があることを確認した。当該部分において、弓筈を掴ませるのは前後の意識によるものであるため、左右の部分はそこと対になる叙述であると考えられる。そして、場面展開を考えても、前後左右、余すところなく協力して川を渡りきるという指示となり、軍の団結力を示すためには〝協力〟と〝横並び〟の両方をうまく示す必要がある。対と展開、二つの視点から両方の意識をバランスよく表していると考えられるのは、やはり㊃である。反対に、「肩を並べ」を持たない㊁は、前後左右の対と言うには弱い。そのほか、㊂は「力をひとつになせ」とあるように〝協力〟に重点が置かれ、㊄は「肩を並べ」のみで〝横並び〟だけに焦点が当たっている。前後左右の対が未熟なところから、対を明確にするために〝横並び〟の意識に焦点を当てていき、そうして行き過ぎた〝横並び〟の強化を抑えて〝協力〟と両立させたのが㊃の段階だと考えられる。

㊀は判断が難しいが、読み本系からの影響が強いことを考えると、㊁よりも古い可能性がある。そのため、この〈隊列認識〉という点においては**【図1】**から、城方本などがやや古態に近い形で先後関係の想定ができる。㊅は〈隊列認識〉における位置づけがかなり難しい。

第三節の〈水深認識〉は最も差が大きかった。それぞれ、〈微視指向〉や整理の方向が異なる〈文脈一本化指向〉、不自然さの解消などを行う〈文脈整理指向〉などが認められた。

これら指向によって諸本の位置づけを考える際はその不可逆性が焦点になるだろう。①（**【表3】**を参照）と⑦を比較してみると、どちらも水深の深まり表現の連続性は存在していたが、その順序は異なっていた。⑦は「鐙を強う踏め」と、まだ鞍壺のあたりまでは水位が迫っていない状態で体勢を定め、水勢に対処しようとしている。そして、そのようにしっかりと腰を据えているからこそ、馬の頭も引き上げることが容易である。そのように、体勢に無理がない状態を無視してまで「しとむ」と

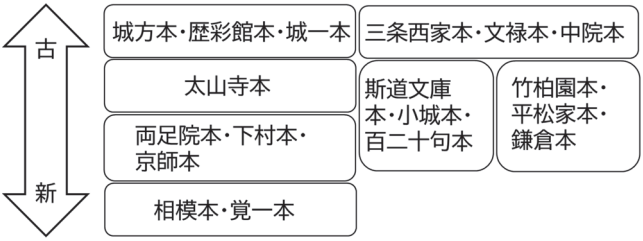
「沈む」の順に変更するのは、物語に手を加えようとするような者たちの意識として考えにくい（二十）。

また、ⅢとⅣは重なる要素が〝馬には弱く〟だけであり、ⅢからⅣ、あるいはⅣからⅢへと派生することは不可能に近い。つまり、この二つは全くの別系統として祖本の段階から枝分かれしたものだろう。それと近い理由で、この二つが持たない要素を持つものへの派生も考えにくいため（二十一）、Ⅲ・Ⅳは古態の位置に置くことはできず、必ずいずれかの下位に置くほかない。

Ⅲについては、すでに指摘したとおり、Ⅰでは不自然であった馬の頭を引き上げる体勢が、Ⅲでは鞍壺にいる状態となり、適当と思われる。その点で言えばⅠよりも後出的とも思われるが、しかし〝三頭〟と〝鐙〟の連続性は生じていなかった。体勢の適当さか、移動の適当さかで叙述認識が分かれているのである。現時点では並列に扱うほかない。

ⅤとⅥについても比較してみると、ⅤはⅠと同様に体勢の不自然さがあった。Ⅴは〝鐙〟を持たないため、少なくともⅠよりは後出だろう。ただし、〈隊列認識〉を犠牲にしてでも〈水深認識〉へ焦点化（二十二）しており、この後の平等院での戦い、もっと言えば頼政挙兵譚という大きな枠組みから切り離されて、〈宇治川渡河ばなし〉として渡河の困難さに焦点を当てて描いているということである。これは〈プラットフォーム論〉〔野中哲照（二〇二二）〕（二十三）で考える必要がある。

Ⅵは深まり表現の連続性は阻害されているものの、体勢の不自然さは解消され、〝鐙〟から〝三頭〟への移動の問題も解消されている。先ほどと同様に、あえて不自然にする理由は考えにくいため、Ⅵは①・Ⅲおよび Ⅴよりも後出なのであろう。そして、Ⅶが深まり表現の連続性をも維持している点を踏まえると、ⅥよりもⅦのほうが後出だろう。以上を図にすると【図2】のようになる。



【図2】

残るは〈対岸認識〉である。この認識を考えるうえで重要なのは、敵が近づいてくるのに合わせて先に防御する文脈（以下〝予防文脈〟）、敵の攻撃に合わせて防御する文脈（以下〝受動文脈〟）、敵に近づくことで攻撃できる距離でも自軍から攻撃はせず、敵の攻撃に合わせて防御を行う文脈（以下〝自制文脈〟）の三種類に分けられることである。

これは、本場面直後の平等院での戦いや、頼政挙兵譚の展開とあわせて考える必要がある。〝予防文脈〟は初めから防御をしているため、後の「火出づるほどぞ戦ひける」という攻めの様子と乖離している。むしろ、敵の攻撃による渡河の困難さに焦点が当たり、〈宇治川渡河ばなし〉に終始する文脈である。

〝受動文脈〟は、〝予防文脈〟よりも守りに入るのが遅くなるため、最初の勢いこそあるものの、敵に先制攻撃を許しているかのような内容であり、やはりこの後の平等院での戦いの勢いと、勝利の文脈にはそぐわない。

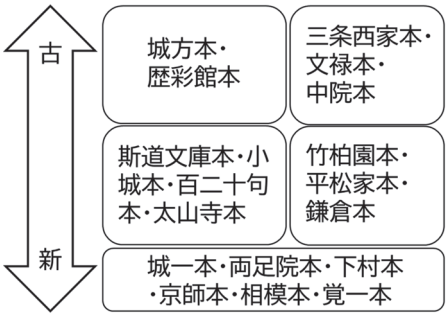
〝自制文脈〟は、川を渡っている最中でも敵が近づいてきたらこちら側から弓を引いて攻撃したい、という忠綱や兵たちの考えがうかがえる。それほどに勢いがあり、敵を打ち倒そうという気持ちにあふれている者たちだということを表現したいのである。これならば、後の勝利の文脈ともそぐう勢いだろう。ではなぜ、その勢いを止めるように「弓引くな」という指示をしたのか。それは〝宇治川渡河〟の成功につなげなければならないことと、制することで勢いを残したまま対岸に渡りきることができるためである。それが勝利につながったということを描いているのだ。

勝利に向けて勢いを残しつつ、渡河は無事に成功しなければならないという意識に呼応して、〝予防文脈〟から〝受動文脈〟、そして〝自制文脈〟へと練成されていったのだと考えられる。これは離れた場面と場面の出来事や人物などを用いて関連性を生み出す〈紐づけ指向〉による練成である。

〝予防文脈〟は㋐、〝自制文脈〟は㋔が持っている文脈であり、この二つの位置づけはたやすい。問題となるのは〝受動文脈〟を持つ㋑・㋒・㋓である。㋑と㋒は、第四節で述べたように、「常に」の位置の違いがあった。この点で見れば、㋒は㋑よりも後出で、さらに㋔に近い。㋑は、〝受動文脈〟であるため、文脈自体は㋐よりも後出と考えられるが、「常に」がない点を考えると、要素としては㋐よりも古い可能性がある。直線的な位置づけは難しいと考え、ここでは並列としたい。

㋒は、「過ちすな」と「押し落とさるな」の両方を持っており、片方ずつを持つ㋐と㋔がお互い先後関係にあることを考えると、それらの中間的な本文であると想定できるだろう。㋒が、㋐と㋔の共通祖本の位置にあるのではないかという考えも当然浮かぶが、**【図1】**と**【図2】**で示したとおり、中間に位置づける、あるいは少なくとも㋐に相当する伝本よりも後出であることが指摘できた。〈隊列認識〉や〈水深認識〉でそのような位置づけができ、かつ「常に」のような部分も鑑みると、ここでは中間に位置づけるのが適当だと考えられる。

㋓は先にも述べたとおり、目立った〈指向〉が確認できないが、近いのは㋑である。これまで㋒と並ぶ位置に置いてきたが、**【図1】**に示したように、それよりもやや古い可能性がある。



【図3】

以上をまとめると**【図3】**のようになる。八坂系一類本について述べれば、二類本などと並列であることがほとんどではあるものの、語り本という枠組みのなかではおおよそ古態に近い位置づけであると指摘できる。また、周辺本文や一方系諸本についても、従来の説とは異なる結論となった。

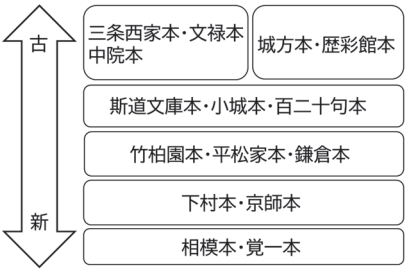
六　おわりに

以上、〈宇治川渡河ばなし〉の位相差について、場面を〈隊列認識〉〈水深認識〉〈対岸認識〉の三場面に区切り、考察を行った。〈隊列認識〉については、第二節で前景化の強弱の差を確認し、第五節では、〈隊列認識〉における前景化の強弱の差が、後の平等院での戦いとの関係によるものであると考え、どちらの前景化を強くしているかによって、諸本の位置づけをを想定し【図1】に示した。

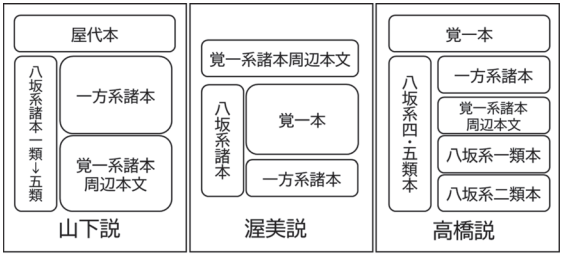
〈水深認識〉では、第三節で〝水への対応〟と〝馬への対応〟の違いや、〝水勢〟と〝水深〟の文脈の違い（二十四）などを指摘し、第五節では不自然な文脈（叙述順）の差や、〝水深〟への焦点化などから諸本の位置づけを想定し、【図2】に示した。

〈対岸認識〉は、第四節で〈文脈整理指向〉や〈平明化指向〉〈明瞭化指向〉などを確認し、第五節では後の場面などとの〈紐づけ指向〉をもとに、三種類の文脈の先後関係を想定し【図3】にまとめた。

全体の結論を鑑みた諸本グループの先後関係は【図4】のようになる。三条西家本らと城方本らはどちらが古いと言えるかが難しいため、本図では別系統として扱い並列に配置している。また、城一本、太山寺本・両足院本は場面によりグループが分かれたため煩雑を避けて本図には記載しなかったが、城一本・太山寺本は少なくとも竹柏園本らよりも古く、両足院本は下村本らよりは古いと考えてよいだろう。すなわち、一方系諸本が最も新しく、八坂系一類本か二類本が古態の位置に規定できるということである。ただし、これは直接的な書写関係等を表しているのではなく、あくまで〈指向〉の先出性、後出性のみに焦点を当てたものである（二十五）。従来の説では【図5】のような形が想定されていたが（第一節でも述べた）、それらとは異なる先後関係を示すこととなった。実際には、八坂系を五類に分類したのは山下説であるため、高橋・渥美説と山下説とでは細かな伝本の分類や呼称に差があるが、比較のために山下説の呼称で統一すれば、おおむね【図5】のような形になる。



【図4】



【図5】

また、一部で覚一本がバランスのよい叙述をしていると述べたが、本稿で主に明らかにしたいのは覚一本の練度の高さについてではなく（これを否定するのでもない）、三条西家本など八坂系一類本と諸本との差である。つまり、覚一本（およびその他諸本）について述べるのは、八坂系諸本を考えるための材料としてである。それによってわかるのは、これまで述べてきたように、八坂系一類本と一方系諸本とで比べると、八坂系一類本は常にその対極に存在しているということであり、先後関係においては、整えられた文章からそうでないものへと崩すのは考えにくいため、八坂系一類本は、〈指向〉などをもとにして練成された本文を持つ覚一本よりも古い本文を有していると言える。

先行研究（〔千明守（二〇一三）〕など）では、このような「崩れ」を文章の不自然さと誤字脱字によるものとで混同していたために、「崩れている本文が新しい」という結論につながったのではないだろうか（二十六）。誤字脱字などによる崩れは、たしかに後出の痕跡と考えられるが、それによって想定できるのはその伝本の直前直後あるいは直線関係のみであって、まったく異なる系統の伝本を比較して諸本全体の先後関係に位置づけられるようなものではない。また、文章の不自然さなどを「編集不手際」として後出の根拠とするが、これはいくつかの本を突き合せて、ここはこの本、こちらはあの本、などのように編集している様子を想定しているのだろう。しかし、これでは各伝本の〈指向〉は考慮されていない。

〈指向〉は諸本全体を概観したときに、『平家物語』の枠組みや展開、表現方法の変化を捉えるものであり、それがすなわち系統を異にする伝本の先後関係を想定することにつながるだろう。「編集不手際」とされてきた現象は、おおむね〈指向〉の差で解決できる。〈指向〉のような意図的な改変と、誤字脱字等のような無意識的な変化は全く別のものということである。

本稿では文献学的手法はあまり用いず、近似した詞章を持つ伝本を一つの群として扱ったが、これらの群の中で誤字脱字、用字の共通性等を検討することで、より細かな諸本の先後関係を想定できるのではないだろうか。

さて、巻四〈宇治川渡河ばなし〉の検討により、本場面では八坂系一類本（および二類本）が一方系諸本などよりも古態本文を存しているという結論に至った。本場面に言及して先後関係や〈指向〉を説明した先行研究は管見の限り存在しないため、これらは本稿の成果と言ってよいだろう。ただし、本稿で得られた結論は、巻四の〈宇治川渡河ばなし〉という一場面に限られたものであり、必ずしもこの結論をもって全体を論じることはできない。改めて、他の多くの場面の分析を行うことで諸本ごとに全体の傾向を掴む必要がある。

［注］

（一）『平家物語』は異本が多く、現在五〇〇以上の伝本が確認されている。伝本の形態等をもとに、延慶本や長門本などの読み本系と、覚一本や中院本などの語り本系に分けられる。語り本系はさらに細かく分類され、本稿で用いる三条西家本や中院本、城方本など、灌頂巻を持たないものを八坂系、竹柏園本や平松家本、鎌倉本など八坂系と一方系の中間的本文を持つ伝本を覚一系諸本周

辺本文（八坂系と周辺本文は灌頂巻を持たず、六代の処刑で物語が終わることから断絶平家型とも呼ばれる）、覚一本や下村本など灌頂巻を有する伝本を一方系という。また、八坂系はさらに五つの類に分けられる。本稿で用いた伝本がどの分類に属するかは［依拠テキスト］に示した。

（二）本稿で用いる括弧の意味は以下のとおりである。［　］参考文献。（　）内容の補足。「　」引用本文。〈　〉指向等に関係する用語。〝　〟場面の要素や語句の強調等。

（三）三条西家本の章段名は本文中にはないため、目録と節（長点か）から推測した。参考として、中院本での章段名は「うしはしかせんの事」である。

（四）書誌情報は［山下宏明（一九九七）］所収「八坂系平家物語書誌」に詳しく、紙幅の問題もあるためここでは改めて掲載しない。

（五）巻一（巻二・三にも言及しているが、巻二・三の詳細な検討は近時発表予定である）、及び巻四の一部については、すでに論稿にしているものがある［吉永優真（二〇二三）・（二〇二四）］。

（六）指向論は［野中哲照（二〇二二）］に詳しい。

（七）忠綱の英雄性については、［梶原正昭（一九九八）］二六二頁にも一部指摘がある。

（八）語りと読みのどちらを重視しているかの違いもあるだろうか。

（九）『平家物語』をはじめ、『保元物語』『平治物語』などでも「手に手を」と「手を」が混在している。

（十）小城本・斯道文庫本は**【表1】**に掲げた本文の後、「弾まば」を「忍俊不禁」とする。他に、「𠀋羊巾」（合わせて一文字で「しころ」）という文字や「電反」（てへん）など共通の漢字運用をしており、相当に近い関係性にあると思われる。ちなみに、「忍俊不禁」は中国語の成語で、「忍俊」が「笑いをかみころす。笑いをこらえる」、「不禁」が「耐えられない」という意味であり（大東文化大学中国語大辞典編纂室 編『中国語大辞典　下』（角川書店、一九九四初版）二五五九頁）、合わせて「笑いを耐えられない、こらえきれない」の意味となる。同辞典の例文には趙璘「因話録」が挙げられている。本場面での意味とは異なっており、そのまま適用することはできないが、おそらく使用は笑って肩を弾ませる様子からの連想か。「はずむ」という語彙との関連性については現状不明である。日本語学的見地からの調査が必要だろう。

（十一）文禄本のみ、「強く踏み」と文を続けるような書きかたをしている。〝鐙〟と〝三頭〟が連続したものであるという認識があったのだろう

（十二）微視的な叙述とは、語の関連などの細かな範囲に焦点を当てており視野が狭いものを言う。それに対し、物語全体や話の展開などの広い範囲を見渡すような、巨視的な叙述、操作もある。覚一本がこれにあたると想定している。

（十三）新編日本古典文学全集、長谷川端 校注・訳『太平記④』（小学館、一九九八）を参照した。

（十四）実際に三条西家本本文を確認すると、「一き」と読めるものの、「一」の終筆が内向きにはらわれており、仮名の「つ」と誤認してしまってもおかしくない。いくつかの誤脱等を挙げて［今井正之助（一九九七）・（二〇一〇）］に、三条西家本と中院本のどちらが先であるか、あるいは直線関係にあるか、ということが一概に言えないものであるというような指摘があるが、この場面においては、三条西家本から中院本への直線的な関係をうかがわせる。

（十五）竹柏園本の影印を見ると、当該部分は丁の表裏が変わった部分（二三ウ、二八六頁）である。目移りによる脱落が起きてもおかしくないだろう。

（十六）『大漢和辞典』の説明には「さしづばた」「さしづする」「さしまねく」の三つの意味が示されている。鎌倉本では「て」と続くことと、場面状況を鑑みるに「さしづして」と訓むのが妥当か。（諸橋徹次『大漢和辞典　巻十二』平成二年修訂第二版、九四四・九四五頁）

（十七）本場面直後の本文は、城方本においても同様のものが続くため、〈対岸認識〉の部分で城方本と城一本とを分けるのは、「弓引くな」の有無と、末尾が「打ち上げ」となるか否かの二点である。

（十八）「滋藤の弓」相当がなく、「切班の矢」と「太刀」の順が反対で、「太刀」は「赤銅造り」とする。また、「高角」を「鍬形」としている。「矢」を背負っている以上、弓を持っていないことは考えられず、脱落したか、あるいは想定可能ということでわざわざ描かなかったということなのだろう。「矢」と「太刀」の順はおそらく上から下へと描く意識があったのだろう。甲から矢、太刀と来て、次は馬の毛並みに鞍の模様と順次視線が下がっていくのである。「赤銅」と「黄金」ではかなり見た目が異なるが、稿者の力不足により、本稿では判断しきれないところである。「鍬形」については、他本のような「高角」自体が「鍬形」の代わりに付けるものであるため、同一視してよいだろう。

（十九）原文「けちやう」。おそらく「朽葉」を「くちよう」と読み、それが変化したものか。

（二十）読者や聴衆を想定するならば、より目を引くように、そしてよりわかりやすくすることを求めるだろう。語りとしては、他の語りとの差別化を図る意図も生まれてくる。また、読者などを想定しない（単に書写するだけなど）のであれば、そもそも改変することの優先度は低く、諸本の性格にここまでの差が生じること自体が説明できなくなる。

（二十一）他の伝本を見て要素を追加することは可能だが、それは同時に、Ⅲ・Ⅳ以外に、ここで追加された要素をもとから持つ伝本が存在していたということであり、そのような想定ができる以上、古態の可能性を示すことはできない。また、〈隊列認識〉の部分でⅢと同じ伝本が持つ「数多が力を一つに」が延慶本・長門本にも存在すると指摘したが、延慶本には「馬の頭下がらば、弓のうら筈を投げかけて引き上げよ。強く引きて引きかづくな」、長門本には「手綱に身をあらせよ。さればとて引きかづくな」といったような〝馬の頭〟に相当すると思われる一文が存在している。

（二十二）特定の人物・もの・ことに集中して叙述、描写を行うこと。

（二十三）〔野中哲照（二〇二二）〕では、〈プラットフォーム論〉について、

> テクストとしての『平家物語』が駅のプラットフォームに停車中の列車で平家が外伝（客車）を連結させたり、逆にそれが重荷になると再びプラットフォームで外したり、と言うことである。これの応用形と言ってよいと思うが、〈中略〉有名な章段が取り出されて語られ、そこだけ練り上げられ、再び『平家物語』に戻されたと思しき練度のむらを含んでいる。

と説明している。『平家物語』が固定化したテクストだと言えるのは、おそらく覚一本（一四世紀後半頃）以降で、それ以前は流動展開の様相がはなはだしく、固定化した『平家物語』という概

念のままでは、実際に起こっている現象を把握することが難しい。一章段の有無・順序が諸本間で異なるという現象を説明するためには、緩やかで幅のある『平家物語』を想定する必要がある。固定化した文献としての『平家物語』テクストの周辺には、説話単位で平家関係の話が多く存在し、テクストの内と外との境界線も曖昧であった時期がありそうである。そういった説話単位での出入りを、電車のプラットフォームになぞらえたものがこの理論だ。そのような現象を説明するためには、〈プラットフォーム論〉が必要である。太山寺本のように、諸本全体からうかがえる論理の練成過程からやや外れていくようなものは、〈宇治川渡河ばなし〉単体として『平家物語』の内外で成長した可能性があるため、〈プラットフォーム論〉としての想定が適している。

（二十四）ちなみに、同じく宇治川を渡る巻九「佐々木宇治川渡事」（三条西家本）では、「さかまく水も速かりけり」や「さしもに速き宇治川」という表現に加えて、大綱に乗りかけた梶原が下流に流されていることなど、〝水勢〟表現がかなり顕著に表れている。「正月廿日」で、雪解け水により水嵩が増していることも示されており、〝水勢〟を中心に描くのもこれが要因とみられる。ただし、本場面は五月雨（つまり梅雨）によって水嵩が増しており、雪解けとは違った勢いであったと思われる。それは、巻九において「鬼神まではよもあらじ」と忠綱を評価することからもうかがえる。このような点も、〝水勢〟と〝水深〟の文脈の違いと通じているのだろう。

また、宇治川の水勢の激しさは『承久記』にも見える。下巻の〈宇治川渡河ばなし〉では、やはり雨が降り水勢が増している。渡ろうとする鎌倉側の兵たちも、つぎつぎに流される様子が描かれるが、大将格など強馬に乗っている人物は渡河に成功している。『平家物語』の忠綱と同様、宇治川渡河は英雄化に適した話柄なのだろう。慈光寺本では、「河渡の子細は知ておはするか」として説明する場面（下巻一三ウ）において、「強き馬をば上手に立弱き馬をば下手にたて」など『平家物語』の本場面と似た叙述が見られる。

『承久記』本文は以下を参照した。

慈光寺本…村上光徳『承久記　慈光寺　全』（一九八五年、桜楓社）

前田家本…日下力・田中尚子・羽原彩『前田家本　承久記』（二〇〇四年、汲古書院）

古活字本…松林靖明『承久記』（一九八二年、現代思潮社）

（二十五）八坂本→周辺本文→一方系という順序は、近年の『平家物語』研究の動向と異なるものである。これについては今後も順次補強していく予定である。

（二十六）このほか、中院本が版本であるために、出版時期が写本に比べて下ることで八坂系諸本を後出とみなす向きもあるだろうが、すでに［佐佐木八郎（一九四九）］が述べるように、その書誌学的形態と、本文の成立時期は別に扱う必要がある。たとえば、現代において覚一本本文を一切の改変・誤脱などせずに刊行した場合、書誌としては現代のものであるが、その中身・本文が当時のものだということは自明である。

［依拠テキスト］

語り本系

八坂系諸本

文禄本……一類A種。日本古典文学会『復刻日本古典文学館　平家物語　文禄本　巻一』（日本古典文学刊行会、一九七三）『復刻日本古典文学館　平家物語　文禄本　巻四』（日本古典文学刊行会、一九七三）の複製本による。

三条西家本……一類B種。前田育徳会尊経閣文庫の写本（三―二五）による。稿者は複写を閲覧している。

中院本……一類B種。国立国会図書館デジタルアーカイブの画像（WA七―三三）による。今井正之助・千明守『校訂　中院本平家物語　上』（三弥井書店、二〇一〇）の本文を参考にした。

歴彩館本……二類A種。旧称、京都府立総合資料館本。京都府立京都学・歴彩館デジタルアーカイブの画像（貴重書五〇一）による。

城方本……二類B種。国立公文書館内閣文庫のデジタルアーカイブの画像（特一〇一―〇〇〇七）による。

太山寺本……三類。『太山寺本　平家物語』（汲古書院、一九八六）の影印による。

両足院本……四類。伊藤東慎他『両足院本平家物語　一』（臨川書店、一九八五）の影印による。

城一本……五類。國學院大學図書館デジタルライブラリーの画像（貴一九五八―一九六九）による。

覚一本系諸本周辺本文

竹柏園本……『平家物語　竹柏園本　上』（天理大学出版部、一九七八）の影印による。

平松家本……京都大学文学部国語学国文学研究室編『平家物語　平松家本』（清文堂出版、一九八八）の影印による。

鎌倉本……『平家物語　鎌倉本』（古典研究会、一九七二）の影印による。

斯道文庫本……松本隆信『百二十句本平家物語』（汲古書院、一九七〇）の影印による。

平仮名百二十句本…水原一『平家物語　上』（新潮社、一九七九）の本文による。

小城鍋島文庫本……『佐賀大学附属図書館蔵　小城鍋島文庫本　平家物語』（汲古書院、一九八二）の影印による。

一方系諸本

京師本……福田晃・佐伯真一・小林美和『平家物語（上）』（三弥井書店、一九九三）の本文による。

下村本……國學院大學図書館デジタルライブラリーの画像（貴二三〇四―二三一五）による。

覚一本……『高野本平家物語　四』（笠間書院、一九七三）の影印による。『平家物語　上』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九一）を参考にした。

取り合わせ本

相模女子大本……巻四は一方系とされる。弓削繁『平家物語　上』（古典文庫、一九九七）の本文による。

読み本系

四部合戦状本……高山利弘『訓読読四部合戦状本平家物語』（有精堂、一九九五）の本文による。

延慶本……栃木孝惟・谷口耕一編『校訂　延慶本平家物語

（四）』（汲古書院、二〇〇〇）の本文による。
長門本……麻原美子・小井土守敏・佐藤智広『長門本 平家物語 二』（勉誠出版、二〇〇四）の本文による。
※対照の便宜のため、わたくしに釈文化した本文を用いた。また、引用に際して傍線・括弧等を付したところがある。

［参考文献］

山田孝雄（一九一一）『平家物語考』（『平家物語につきての研究 前編』所収）東京：国定教科書共同販売所
高橋貞一（一九四三）『平家物語諸本の研究』東京：冨山房
佐々木八郎（一九四九）『平家物語の研究（中）』「第七章第一節」東京：早稲田大学出版部
渥美かをる（一九六二）『平家物語の基礎的研究』東京：三省堂
山下宏明（一九七二）『平家物語研究序説』東京：明治書院
山下宏明（一九九七）『平家物語八坂系諸本の研究』東京：三弥井書店
今井正之助（一九九七）「中院本『平家物語』本文考」 山下宏明編『平家物語八坂系諸本の研究』東京：三弥井書店
梶原正昭（一九九八）『平家物語鑑賞 頼政挙兵』東京：武蔵野書院
今井正之助（二〇一〇）「解題 中院本・三条西本の諸問題」『校訂中院本平家物語 上』東京：三弥井書店
千明守（二〇一三）『平家物語屋代本とその周辺』東京：おうふう
野中哲照（二〇一二）『那須与一の謎を解く』東京：武蔵野書院
吉永優真（二〇一三）「『平家物語』三条西家本・中院本の問題点 ――巻一を中心に――」『古典遺産』第七二号
吉永優真（二〇一四）「『平家物語』八坂系一類本・二類本の位相差 ――巻四の仲綱ばなしについて――」『國學院大學大学院文学研究科論集』第五一号

※一部、注に示したものもある。

［付記］

貴重な典籍（三条西家本）の閲覧をご許可くださった前田育徳会尊経閣文庫に、あつく御礼申し上げます。

（よしなが ゆうま・國學院大學大学院文学研究科博士後期課程）